

らぬいま  
くま

不知火海・球磨川流域圏学会

# NEWS LETTER

令和4年度第2回現地見学会報告

タイ王国滞在記

平成8年頃の佐敷本町商店街の写真

不知火海・球磨川流域圏の山歩録 三角岳

自伐型林業に集まる関心

～山江村で自伐型林業の研修会始まる～

時松雅史

入江博樹

時松雅史

高平雅由

つる詳子



32

2023年4月23日発行

獅子島・黒崎空中展望所にて



令和4年度第2回現地見学会記録

# 「獅子島訪問」

熊本高等専門学校 時松雅史



今回訪問したのは、鹿児島県最北端の島となる獅子島である。島の周囲 36.5km、島中央には七郎山 (363 m) がある。10月16日(日)、鹿児島県長島町の北側にある諸浦(しょううら)港に集合。参加者は13人。天気予報では午後から雨との予報もあったが、幸い朝から快晴で絶好の旅行日和となった。

フェリー乗り場の駐車場にはすでに30台以上の車が駐車されていたが、これらの車は大半が獅子島の住民のもので、フェリーから降りて利用するものだという。一行は9時30分発獅子島の片側(かたそば)港行きのフェリー・ロザリオ号に乗り、20分の海上の旅を満喫した。波は穏やかで揺れもなく快適であった。

片側港に着くと、3台の車に乗り合わせて、島を反時計回りに幣串(へぐし)港に向かった。この港にも水俣港から旅客船が出ているが、車両を運搬しないため今回はわざわざ長島町まで遠回りしなくてはならなかったというわけである。その幣串にある旧幣串幼稚園跡で、現在婦人会の活動場所兼地域の避難所となっている施設で、獅子島の現状についての講和を聴いた。講師は長島町議会議員で東町漁業協同組合理事の池田安彦氏である。池田氏はブリとタイの養殖業に携わり、漁協の理事も10年間務めている。島の声を行政に反映させるべく議会議員となり現在2期目だそうである。その池田氏から次のような話があった。

島の人口は、令和2(2020)年で647人。昭和55(1980)年の1,492人と比べると大幅に減っている。年齢構成は65歳以上が278人で高齢者の割合が高い。しかしながら、14歳以下の子どもの数は90人で平成27(2015)年と比べて21人増加している。これは島で後



継者が増えたことが大きな理由で、加えて町が主導して婚活イベントを積極的に開催し、カップルを誕生させたことが子どもの増加につながっている。次に島の産業では、農業と漁業が主力となって、農業はミカンとデコボンの栽培が盛んである。

漁業はブリとタイの養殖が多く、「鰯王」、「鯛王」のブランド魚として売り出している。「鰯王」には曲もつくられ、演歌歌手鳥羽一郎の作曲を手掛けた人が作曲、歌は地元の人が歌っている。東町漁協の出荷額は100億円に上り、海外20カ国に輸出、水産庁からも一目置かれている。漁協で働く人は30、40歳代が多く、若手を中心となっている。また近年はアオサの栽培も健康ブームが後押しとなり盛んである。

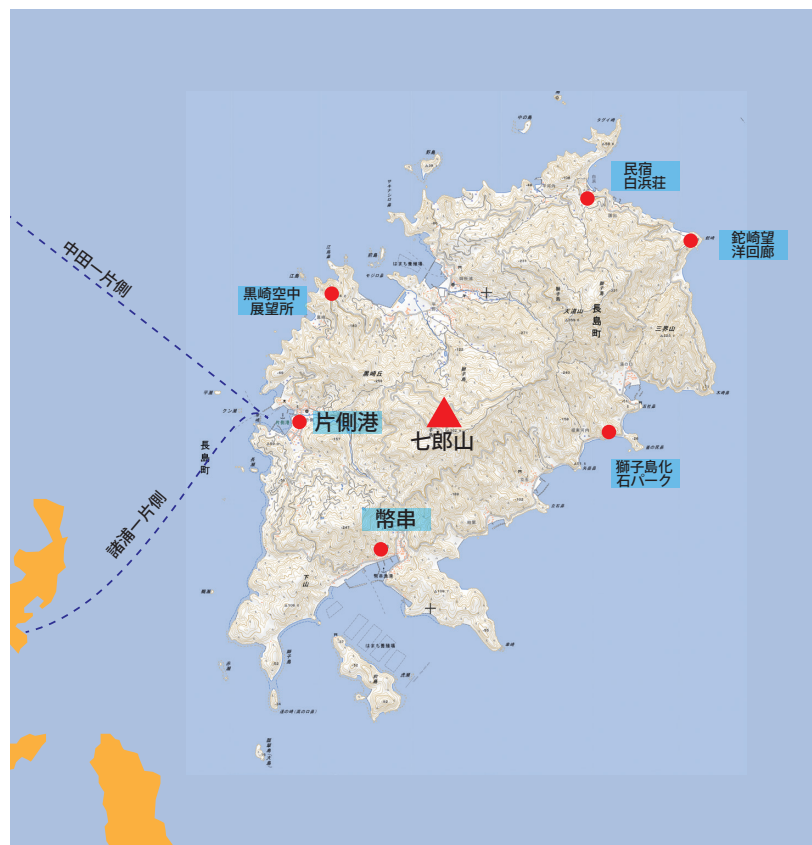
次に島の医療体制では、週に2回島へ往診に来る。緊急時には島にある貸し切り船を使って病院へ連れていく。介護施設もないことから、医療と介護の面で悩みの種となっている。次に島の今後については、やはり島民の夢である長島町の伊唐（いから）島を結ぶ獅子島架橋建設構想を実現すること。また島と他所との交流人口を増やすため、獅子島ウォークやフェア開催に力を入れている。特にウォークは人気があり、半日で申し込みが一杯になり、抽選で参加者を選んでいる。

講話が終わって、参加者から、獅子島にも水俣病患者はいるのかとの質問があり、池田氏から患者は多いとの回答があった。また今夏八代海では甚大な赤潮被害があったが、長島ではどうかとの質問があり、長島も一部では被害が発生したとの回答があった。

1時間ほど講話を聴き、次に獅子島化石パークに向かった。ここは観光客向けの化石採集スポットとして整備されている。先の池田氏の話では、もっと化石の町として売り出そうと来年から建物等も含めて整備が進むようである。小さな貝殻の化石であれば持ち帰り可能とい



うことで、参加者は宝物でも探すかのように化石採集を楽しんだ。つるさんも立派な化石をGETしてご満悦の様子であった。筆者の私も頑張ってみたものの、残念ながら見つけることができなかった。





次に、島の東部にある鉾崎望洋回廊の展望台から、御所浦、天草上島、下島方面を眺望した。あまり見慣れない角度からの風景だったので、天草であると説明されない限り自分でもどこの島なのか分からないと思った。



次に、民宿白浜荘で昼食をとった。ここは普通の民家を改築して民宿を営んでいる様子で、我々を庭で寝そべっていた猫たちが歓迎してくれた。料理はイタリア料理ということで、メニューは、ブリのカルパッチョ、イサキとアサリにアオサを加えたアクアパッツァ、タコとジャガイモのバジルソースあえ、そしてさつまいもプリンの4品。これにご飯とコーヒーがついたのでお腹一杯になった。



食後は、黒崎空中展望所に行き、展望所から天草下島を眺望した。ここは最近整備が行われた様子で、写真を撮るには絶好のスポットである。遠くに天草の中田港に向かうロザリオ号を見た後、記念の集合写真を撮った。

午後13時40分ごろに最初に着いた片側港にもどり、獅子島小中学校の下にある獅子島屋で買い物をした。



参加者は冷凍の海産物等を手にしていた。私もヒジキを買った。この店の隣にはクビナガリュウとアンモナイトのモニュメントが設置され、日本有数の化石産地であることをアピールしていた。一行は14時30分のフェリーに乗船、最初に集合した諸浦港で会長の堤先生から挨拶があり、その後解散した。

今回、終日同行していただいた高坂紀子氏からお土産として島の特産物であるアオサを頂戴した。また講話を引き受けていただいた池田安彦氏にはお茶や島の資料を頂戴した。あわせて感謝申し上げる次第である。

最後に、はじめての獅子島訪問で私が目に留まったことを挙げると、一つは幣串あたりで見た食料品の移動販売車である。島には店が少ないので、高齢者のために週1くらいで長島から来ているのだろう。私の父もこうした移動販売車に世話になっているので、今後も続けてほしいと思った。もう一つは島の畑を囲っている鉄の柵である。こうした島にもイノシシやシカの被害が出ているのかと思った。それから講話を聴いた施設のグラウンドで小さい子どもを2、3人、そして母親らしき人を見かけたことも印象に残った。池田氏が語っていたように子どもの数がわずかではあるが増えているのだろう。今度島に来たときは、七郎山や獅子島神社にも訪問してみたいと思った。





写真1

2020年10月から2021年4月までの半年間をタイ王国のバンコクに滞在していたので、その時に体験したことについて書いてみようと思います。

## タイ高専について

タイ王国初の高専として「日本型高等専門学校の教育制度(KOSEN)」を本格的に導入したKOSEN-KMITLが令和元年5月に、翌年の令和2年6月にはKOSEN KMUTTが2校目の高専として開校しました。

熊本高専からも支援のために教員が派遣されることになり、私はKOSEN-KMITLに情報電子系の教員の支援として派遣されることになりました。

2020年4月からタイのバンコクに滞在する予定でしたが、3月末にバンコク市内はコロナによる完全ロックダウンが実施され、就労のためのビザ発給もなくなりました。

タイのKOSEN-KMITLでは5月から授業が始まったため、私は日本の自宅から遠隔でタイの学生たちへオンライン授業を行いました。

タイ高専の学生さんたちの授業は英語で行われています。夏になっても状況は変わらず、このまま1年オンラインかも思っていたら、2020年10月に急遽ビザの発給が決まり、大慌てで渡航の準備をしてタイのバンコクへ旅立ちました。

私のタイでの住まいはバンコク市内のBTS エカマイ駅の近くのコンドミニアムに決まりました。屋上からはチャオプラヤ川も見えました(写真1)。

# 「タイ王国滞在記」

熊本高等専門学校 入江博樹

KOSEN-KMITLは、スワンナプーム国際空港のすぐ近くにあるキングモンクット大学ラカバーン校(KMITL)の敷地内にあります。毎朝6時前に起床して6:30ごろに迎えに来る高専でチャータした車の乗合のハイエースに乗って学校へ通勤していました。バンコク市内の朝晩はあちこちで大渋滞しているので、8時少し前に学校に到着していました(写真2)。

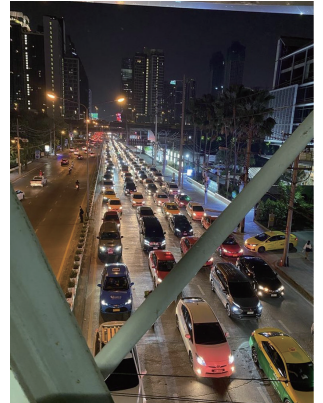


写真2

夕方は17時までに仕事を終えて再びハイエースでバンコク市内まで戻っていました。きっかり17時に退勤していたのは、前年に派遣された教員らの弁では日本人が遅くまで仕事をしているとタイ人の教員らが気を遣って帰宅できないからということでした。

これは日本人の取り越し苦労のようです。実際、何もない日には若い教員らは夕方になるとさっさと着替えて学内のジムに行ったり、逆にロボコンなどの指導があると夜遅くまで熱心に学生らと付き合ったりしていました。

## ラジオやテレビについて

コロナ対策でバンコク市内のカフェやバーも夜間の営業が制限されていたので、夜に出歩くこともなく、自宅で翌日の授業の準備をすることに追われていました。持参したラジオでFMやAMのラジオ放送を聴いていました。タイ国営放送はFMで24時間の英語放送を流していました。朝には15分だけの日本語のニュースも流れていたのほぼ毎朝聴いていました。同じプログラムは短波でも放送しているので日本でも聞くことができます。タイ語のAM放送もよく聴いていました。早朝からは多くの放送局でお坊さんの説論の番組をやっているのを聴いていました。何を言っているのかわからないのですが、かろうじて聞き取れる「ブツダ」という単語と窓から見え

るバンコクの朝焼けの空がマッチしていました。バンコク市内ではテレビはケーブルテレビで観るのが普通なので電波を受信してみるという習慣がないようでした。都会育ちの学生さんたちにテレビのアンテナ話をしてもキョトンとしています。

インターネットには国が制限をかけているらしく、一部のサイトにはアクセスできなかつたり、接続にとても時間がかかっていたりしていました。DNS サーバで細工しているようなので、DNS のトンネリングという技術で回避できますがしばらくすると塞がれる場合もあります。インターネットを利用した日本人向けのテレビ放送サービスがあって専用 BOX をテレビと接続すると日本国内向けのテレビを見ることができます。2020 年年末の紅白歌合戦はシンハービールを飲みながら T シャツで見っていました。テレビにも閲覧制限があるようでバンコクの学生らの反政府デモのニュースを見ている時は急に画像が固まったり音声がでなくなったりもありました。

## タイの学期について

タイの学校は 5 月に始まるため日本とちょうど一ヶ月ずれています。2020 年はコロナ禍で新学年が 6 月に開始されました。タイ高専の学生の数名が 3 年次から日本の高専に留学するため、後期の終わりを日本に合わせる必要があり、2020 年は夏休み期間を短縮して対応



写真 3

しました。タイでは年末年始は元旦のみが祝日です。カレンダー次第では、12 月 31 日まで仕事して、1 月 2 日から仕事ということもあります。この年度は幸運にも中間試験後の 12 月 24 日から 1 月 4 日が休みになりました。クリスマスにはタイの学生らとケーキを食べてパーティしたのも楽しい思い出です (写真 3)。

タイでは国民の祝日が急に決まったり、直前に曜日が変わったりもあり、学校の行事予定もコロコロと変わっていました。マイペンランという言葉がピッタリで、終わりよければ全て良いという気持ちで仕事していました。

## 日帰りでの鉄道旅行

慣れない土地でのコロナ禍ということもあり、タイ高専ではまさに盆も正月もない状態で仕事三昧でした。そんな中で日帰りの鉄道旅行をする機会がありました。KMITL のキャンパスはタイ国鉄の東本線の Pra Chom Klao 駅 (プラ・チョムクラオ) と読むらしいが、私が発音しても全く通じなかつた。) と隣接しています (写真 4)。

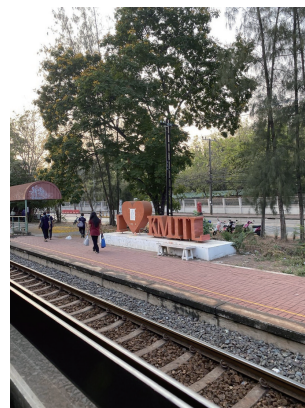


写真 4

始発のバンコク駅 (ファランポーン駅) からカンボジア国境近くの終着駅の Aranyaprathet 駅 (アランヤ・プラテート) らしいがこれも通じない) との間を朝晩 2 本の便で往復しています。乗り鉄な鉄道オタクの私は数少ないチャンスを見つけて往復してみることにしました。

東本線は非電化路線で距離が約 255km です。バンコクを午前 6 時前に出発して終着駅には正午頃に到着します。片道 48 バーツ (約 180 円) です。いわゆる普通



写真 5

列車でエアコンはありません。同僚らを誘うことも考えましたが弾丸鉄旅なので今回は単独で挑戦することにします。どうせならと始発駅のファランポーン駅から乗ることにしました (写真 5)。

タイ国鉄は予想外に時間に正確です。列車の位置を





写真6

ネットで確認することもできます。駅に駆け込んでくるお客さんのために一旦止まるという優しさもありました。車窓から見える自然豊かな風景を見なが

ららのんびりした各駅停車の旅はとても癒されました。バンコク郊外になると沿線には広々とした田んぼが見えます。ほとんどの田んぼは区画整理がされており、農業も機械化近代化が進んでいるのがわかります(写真6)。

田植えをしている地区もありますが、また別のところでは刈り取り前の地区もあります。稲刈りが終わったばかりの地区では農地を野焼きして



写真7

いるところもありました。焼いている煙や藁クズの燃えカスが車内に吹き込んできます。野焼き炎が線路側まで来ていて熱気を感じます。旅行後に見たTVニュースでこれらの野焼きが環境問題になっていると報じていました(写真7)。

どこまでも広がる水田が同じ時期に田植えも収穫もできるのに驚きました。近所のビックCの米売り場ではいわゆるタイ米から日本米まで多数の品種が並べられており、米の産地としての底力を感じました。お昼前には終点のアランヤ・プラテート駅に到着しました。ここからまた同じ列車でバンコクに戻ります。出発までに2時間ほどあるので国境近くのバーンクローンルック国境市場までバイクタクシーで行ってみました(写真8)。

6kmほどの料金に300バーツを請求され、相場よりもかなり高いと思いましたが、コロナでは観光客も少な

いからこの人たちも大変だろうと諦めました。怖かったし。市場の向こう側にカンボジアとの国境線を見ることができました。ボーダーの町は問屋街になっており、カンボジアで製造したいろいろな衣料品や雑貨のお店があります。



写真8

コロナ禍でカンボジアとの行き来は制限されていましたがトラックでの物流は活発で、大きなトラックが国境線を行き来していました。国境線の向こう側に立派なカジノ付きのホテルも見えます。

ここはタイよりもカンボジア側の方が街になっています。コロナ前はタイからカンボジアへの観光旅行者で賑わっていたようです。

しばらく市場をうろろしてから帰りはトゥクトゥクに乗って駅に戻りました。帰りの列車を待っている間に駅前の屋台で焼き芋を売っていたので買ってみました。さつま芋は日本の方が美味しいに決まっているし気温も暑い中で食べる焼き芋は美味しくないはずだとネタになると思っていたのですが予想に反してとても美味しかったです。

帰路では先ほどと反対側の車窓をぼんやりと眺めながらゆったりとした気分を楽しみました。夕焼けも楽しむことができました。途中駅では大量の荷物をもって乗り込んでくる行商らしい人たちもいました。

現地の人と話をしましたが、タイ人にはこの国鉄は遅いというイメージやエアコンがついていないことからあまり人気がないようです。エアコンが快適で目的地まで途中下車なしの高速バスで移動する方が一般的です。途中では弁当や餅などの物売りのおばちゃんおじちゃんも乗り込んできて、車内販売の弁当を味わうのも楽しみでした(写真9)。



タイに住む前だとお腹壊すかもと食べなかったような料理も慣れてくると大丈夫そうなのがわかるようになってきます。

写真9 今回の鉄道旅の

他にパタヤ方面とアユタヤに行くことができました。次回タイに行く機会があれば、タイ北部のチェンマイまでの寝台車やバンコクからマレーシアまでの国境をまたぐ鉄道旅に挑戦してみたいです。間違えた列車に乗ってしまい思わぬ終着駅についた話もあるのですが、また別の機会にお話します(写真10)。

## タイの携帯事情

東南アジアの中でタイは予想以上に情報化が進んでいます。タイの店員さんはいつもスマホを見ていて、お客がきた時だけ笑顔で対応して終わる



写真10

とまたスマホに戻るような人たちも多いです。私は5G対応の最新スマホを持っていたのですが日本では東京・大阪などの首都圏のそれも一部で2020年3月にサービス開始がされたころでした。

同時期のタイではバンコクはもちろんですが国境付近のいわゆる僻地でも5Gのマークが点灯する場所がありました。国内のほぼ全ての地域がストリートビューで見られるようになっています(写真11)。

周辺国との差も歴然です。監視カメラの数も多いです。タイ人の同僚が話してくれたのですが、タイで銀行強盗をしても1週間以内に必ず捕まるのでその手の犯罪

は少なくなったようです。

コロナで隣国から越境してきた外国人がインスタへの投稿から足がついて逮捕されたというニュースも流れていました。タイのテレビニュースでは、殺人現場や列車事故現場の映像がモザイクなしで流れていたり、逮捕された容疑者が警察署の前で大勢の人に囲まれて妙な顔つきでインタビューに答えていたり、日本の報道とは異なる面があります。犯罪抑止にも繋がっているようです。

## 親日の国タイ

タイは親日な国民性といわれていて、私もタイ人から親切にされることが多かったです。街中には日本車が溢れていたり、AKB48の姉妹グループのBNK48や吉本興行のSWEAT16などのアイドルが活躍していたりします(写真12)。

タイ高専の学生さんも親日な人が多いのですが、必ずしも日本だけを慕っているわけではなさそうです。推

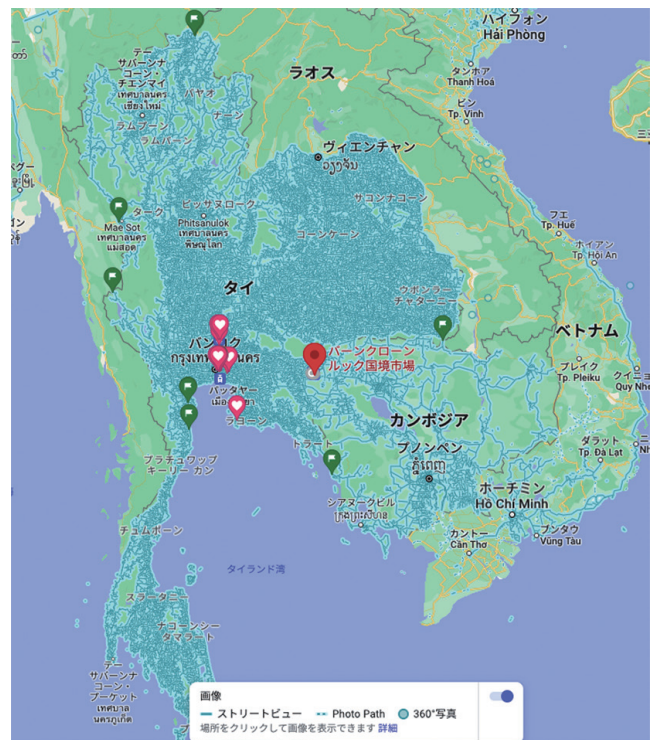


写真11



しのアイドルは BTS や BlackPink といった韓流スターに人気があります。

また、ごく稀ではありますが今の日本の技術に懐疑的な人もいます。失われた 10 年の日本から学ぶメリットは何か?という質問を投げかけたタイ人の同僚もいました。EU やアメリカ以外にも中国やロシアの影響も大きいようです。親日と浮かれているのは日本人だけなのかもしれません。

## タイの天候

タイでは地震や台風など大きな災害は比較的少ないため、高層ビルがニョキニョキと建っています。日本ではあまり見ないような独創的な意匠のビルも見られます。タイでは天気予報のトピックが暑いとか涼しいとかで、雨の降水確率は日本人ほど気にしていませんでした。確かに雨が降ってもそのうち止むので待っていればいいので、そのうちに私も天気予報で雨をそれほど気にしなくなっていました。

私がタイに滞在した時期は雨季が終わって、バンコクの冬と呼ばれている比較的涼しい時期だったので、屋内も屋外も過ごしやすい日ばかりが続いていました。

カレンダーの曜日は土日だけを気にして、いま何月か?とかはどうでも良い感覚になり、その日その日を充実した暮らしができればいいという気分になります。乾季で雨が少なかったこともあり、チャオプラヤー川の河口付近での水位が下がり海水が入ってきているようでした。

ニュースでは水道水に塩分が含まれているので、ペットの犬や猫の給水に注意するようにと伝えていました。通常の飲み水はボトルウォーターなので影響はないのですが、確かに私のコンドミニアムのプールの水からはやや塩味を感じました。

日本のように暑かったり寒かったり、地震や台風に神経を尖らしながら日々工夫しながら生きてゆくのは対照的だと思います。人間という生き物が過ごす場所というのは本来こういう場所なのだろうなと考えるようになり

ました。タイの底力を感じました。近いうちにまたタイに行ってみたいです。



写真 12

# 平成 8 年頃の佐敷本町商店街の写真

熊本高等専門学校 時松雅史

筆者は、平成 8(1996)年から 9(1997)年にかけて葦北郡芦北町佐敷にある商店街の変遷について調査を行った。本稿では、この調査の際に撮影した写真 9 枚を紹介する。この商店街は薩摩街道に形成され、明治以降も地域の商業の中心地として発展した。調査した平成 8 年頃は、明治から昭和初期の商家の建築物が残っており、こうした古い街並みを活かして、街づくりをスタートさせた時期であった。平成 12(2000)年には、県から住民が結んだ「佐敷地区薩摩街道景観形成住民協定」を県景観条例に基づく景観形成住民協定として認定されている。そして平成 21(2009)年度の「くまもと景観賞」大賞に選出されるなど、住民の努力が実を結んだ。しかし、令和 2(2020)年の 7 月豪雨により佐敷川が氾濫し、大きな被害を受けている。豪雨による災害から約三年が経過し、復興が進められているが、古い建築様式の建物が減り、街中には空き地や駐車場が増えている。



写真 1 は、佐敷本町商店街の入り口に当たる場所で、相逢橋付近から、撮影したものである。右側に岩永醤油、左側にひまわり化粧品店、宮本魚屋がある。



写真 3 は、化粧品・小間物のヒサゴ(右側)と高橋酒店である。芦北郵便局の向かい側に位置しているが、現在は井上病院の駐車場となっている。



写真 2 は、右手前からカラホ商会(電器屋)、クリーニング店、藤屋(食堂)が並んでいる。店の前に看板がかかっているの確認できないが、建物は土塀づくりで古そうである。現在は井上病院の駐車場となっている。



写真 4 は、七軒長屋と呼ばれた建物で、大正時代の建築である。かつては数軒の商店が入居していたが、8 年頃は洋服の仕立て業者のみがここで営業していた。既に老朽化が進んでおり、現在建物は解体されている。





写真5は、吉田会館という4階建ての建物(昭和50年代半ばの建築物)があり、ここには結婚披露宴会場、スナック3軒、居酒屋1軒が入居していた。建物の看板にはビヤガーデンという文字も確認できる。この地域の社交場として親しまれた場所だったのだろう。



写真8は、左手前から堀田蒲鉾店、宮崎時計店が並んでいる。2階の窓の造りから、古そうな建物であることが推測できる。宮崎時計店の店主宮崎泉氏は、佐敷本町通りや迎町などの商店主でつくる町四区商栄会の会長で、調査の折には大変お世話になった。現在建物は残っているが、店は閉めている。



写真6は、吉住食料品店で建物は明治初期の建築である。隣の洋風の建物は十字屋美容室で、大正時代の建築といわれている(『熊本日日新聞』(平成12・12・4))。



写真9は、戦後栞屋という屋号でコメ屋を営んでいたが、8年頃は閉業していた。現在は建物が立派に改修され、芦北町薩摩街道佐敷交流館となり、休憩所及びミニギャラリーとして住民に活用されている。筆者が訪問した令和5年3月3日は、ひな人形が3セット飾られていた。

芦北町インターチェンジ近くの「道の駅芦北でこぼん」に立ち寄られた際には、ぜひ佐敷城まで足をのばしてもらいたい。佐敷城に向かう途中に今回紹介した佐敷本町商店街を通るので車窓からでも眺めていただけたら幸いである。



写真7は、左手前が衣料のはた屋である。戦後この場所でずっと衣料品店を営んできた。また店の真向かいには文具の勝屋がある。勝屋は戦前から営業している老舗である。



不知火海・球磨川流域圏の山歩記

## 三角岳 (みすみだけ)

高平雅由



三角ノ瀬戸と天草1号橋。中央の山が飛岳

久しぶりの登山日記です。球磨川流域の山はあらかじめ登り尽くした感があるので、足を伸ばして天草方面に行ってきた。

九州本島から天草諸島に向かってぴょこんと突き出しているのが宇土半島。その宇土半島によって分けられた海が、北側の有明海、南側にあるのが我らが不知火海ということになります。

その宇土半島の西端部に位置する標高 405 m の山が三角岳です。この三角岳は約 300 ~ 400 万年前の火山活動で作られた溶岩ドームで、三角ノ瀬戸を挟んで大矢野島にも飛岳や紫尾山とう溶岩ドームの山がそびえ立ち、この辺り独特の美しい景観を作り出しています。

三角岳の岩石(角閃石安山岩)は昔から石材や碎石として利用されていて三角岳の北麓と西麓の海岸まで張り出した崖では何ヶ所もの採石場があります。

ちなみに 2015 年に世界遺産として登録された三角西港もこの三角岳の西側の麓にあり、その埠頭は対岸の飛岳から切り出された石で作られています。

4月3日月曜日、職場の休館日を利用して登山日としました。

せっかく遠出をして登るのだからと三角岳とそれに連なる5つのピークも合わせて縦走ルートを設定しました。YAMAP(登山アプリ)での参考タイムは約5時間。朝の8時に登山を開始して、休憩をとりながら14時には下山するという計画です。

ところが、その日の朝は、「まあ 400m、程度の低山だから」と舐めていたわけではないんだけど全く緊張感がなくぐっすり朝寝をしてしまい、登山口の駐車場に着いたのが9時半という体たらく。



宇城市三角支所駐車場。背後の山が三角岳

それでも「まあ、15時には下山できるから大丈夫だろう」、ゆっくり登ろう。とま

だ余裕です。空には雲ひとつない晴天。気分よく出発しました。

ところが、いきなり登山口が見つからないという「低山あるある」アクシデント。一応 YAMAP のナビを見ながら歩き始めたわけ



ですが、このナビは山中では命の綱、無類の便利さなのですが、道が入り組んだ街中では全く役に立ちません。そもそも

駐車場として使わせてもらった宇城市三角支所から天翔台登山口まで看板や案内ボードの類が全くなく、曲がりくねった住宅地の道を行きつ戻りつして、登山口にたどり着くまでに 15 分もかかってしまったのでした。

気を取り直して、まずは海拔 205m の天翔台を目指します。名前からして絶景ポイントに違いありません。ほぼ海拔 0m からの出発ですから標高差 200m 余り。これがいきなりの急登。ペースを整える暇もなく、息ががります。日頃の運動不足が恨めしい。

出発時着ていたフリースを脱いでシャツとインナー姿で登りますが、すぐに汗だくです。1、2、3、と歩数を数えながら三百歩登っては一息、次は二百歩、次は百歩とハードルを下げて休憩を取りながらやっとの思いで天翔台に到着。

予定では 35 分のタイムが 50 分。先が思いやられます。それでも天翔台からの眺望は素晴らしく、疲れを忘れさ



麓に見えるのが三角の市街。沖の左側の島が戸馳島。右奥が維和島です。

せてくれます。ザックを投げ出して長めの休憩。

行動中のエネルギー源としていつも携帯している薄皮あんパン5個入り、最近の値上げブームで

随分と高くなったが、この中から二つを腹に収めて次のピーク、オジンバ山に向けて出発。



標高が上がるにつれて展望が開けてきて不知火海方向ばかりでなく、天草の島々まで見渡せるようになりました。(タイトルの写真参照)



人気のない低山の登山道は荒れ放題です。森林の竹藪化が進んでいて大変なことになっています。

踏み跡もなく、倒木やら竹藪をかき分けてのジャングルトレイルです。

こういうときはもう本当にスマホのGPSとYAMAP地図が命綱。こういう低山ほどルートをロストしやすく、高山よりも遭難しやすいものなのです。



山頂に立つオジンバ岩。そう言われれば、爺さんと婆さんが並んで立っているようにも見えなくもありません。

そこです。ほぼ標高は登りきっているのだからかな登山道歩きです。

疲労と暑さのためにへろへろですが山頂が近づくと元気が出ます。

そしてやっとこさ登りついた三角岳山頂。

三角岳直登ルートから外れて途中、オジンバ岳へ寄り道しました。オジンバ岳を漢字で書くと「お爺婆」らしく、なんだか不気味な気配が漂っています。三角岳直登ルートと一変して、ルートはほとんど

山頂は広場になっていて祠や石像が安置(傾いていたりしますけど)されています。展望もよく、南に不知火海、北に有明海が望めました。山頂で遅い昼食を取り、ゆっくり休んだ後、予定していたピークを一つ減らして、高野山西峰、高野山と縦走して、みかん畑を下って三角支所の駐車場に戻りました。歩いた距離、10km。7時間の山歩きでした。低山ながら歩きごたえのある楽しい山でした。





# 自伐型林業に集まる関心

～山江村で自伐型林業の研修会始まる～  
つる詳子



最近、「自伐型林業」という言葉をよく耳にする。実際、自伐型林業の学習会や研修会も全国あちこちで開催され、自伐型林業に参入する若者や林業者が増えている。現在の森づくりの主体である森林組合は1907年からあったが、山の管理・施業は近年まで、山の所有者自らが行うもので、自分で森を伐採する自伐林家が殆どであった。しかし、木材価格の低迷で、林業の後継ぎずるものも減少、林業家の高齢化などで、林業者の数は減少。森林の施業・管理は森林組合の仕事になり、所有者だけでなく、林業に対する国民の関心も薄れていき、放置された山林が増えて行った。その結果、過去植林された人工林は放置され荒廃し、人がいなくなった山はシカの食害で自然林も本来の森の豊かさが失われていった。また、前後植えられたスギやヒノキの人工林は50年を過ぎ、伐採期を迎えたとして、至る所で皆伐が進んでいる。年間雨量が多く、暖かい球磨川流域も例外ではなく、ものすごいスピードで皆伐が進んでいる。そこに起きたのが令和2年球磨川豪雨の際の、山の崩落である。豪雨時における山の崩落は球磨川流域だけでなく、全国でも確実に増えている。この山腹崩落増加の背景には、近年の林業政策の間違いいにあるのではないかと、目を向けられ始められているのが自伐型林業である。

現在の林業は大型重機による広い林道建設、大面積皆伐による施業が主である。実際、今回の崩落も林道や皆伐に端を発した箇所が多く見られた。一方、自伐型林業は、小さな家族経営や数人で行う多間伐施業で、3トンクラスの小さなバックホーや2トントラックで、小さな道を作り、間伐・搬出を繰り返して行き、材の質を高め、収益を増やしていく林業施業である。実際、この自伐型林業の道は、過去の豪雨災害時でも崩落を起こしていないというので、県内外の事例の視察に行き、荒れた球磨川流域の人工林でも可能性を感じ、情報発信を繰り返してきた。

すでに熊本県内外でも自伐型林業の学習会や研修会、また実際に自伐型林業を行っていた方たちと様々なつながりが生まれ、球磨川豪雨による山の災害の対処に頭を悩ましていた山江村と、九州内で自伐型林業を実施してきた九州林業塾の共催で行う自伐型林業を球磨川流域で行う林業者を育てるための39日間研修「鎮山親水林業塾」が開催されることになった。

## 山江村で自伐型林業研修開始



今年1月21日、山江村役場に自伐型林業の技術を習得するための39回の連続研修会の開校式

に12名の受講生が球磨川流域内外から集まった。12名は30代から70代までで女性一人を含む。住まいも水上村、あさぎり町、相良村、山江村、人吉市、八代市、熊本市と広い範囲に及ぶ。すでに林業施業に携わっている人、くまもと林業大学に通う人、チェンソーやバッ



クホーの免許は持っているが林業経験はないという人など、全くの素人と経験の有無・内容も様々であるが、自伐型林業の施業に関しては殆どの方が未経験である。しかし、自伐型林業のノウハウを学び、実践していきたいという思いは強い。



当会の会員でもあり、山江村からのただ一人の研修生・松本佳久さんは、「息子が生まれたと

きに植えたスギの木が枝打ちも間伐もせず、竹も生えてきており、どうにかしないといけないと思っていた。また、自分が住む32戸の集落の8戸で12ヘクタールほどの共有林を持っており、切り捨て間伐のころは間伐していたが、ここ10年程は誰も山に行ったことがない。50年程前に親父の世代が植えて、高校生の夏の暑い時に造林鎌を持って下払いに行ったことを覚えている。ここを何とかできないかと思った」と受講の動機を述べた。こういう山が流域には多いのではないだろうか。多くの山林所有者が同じ悩みを抱えている。所有者は高齢化して、山仕事はもうできないし、木材価格の低迷で森林組合や素材生産業者に依頼して伐採しても手元にはいくらかも残らないので、放置間伐林が増えた。しかし、その一方で50年を過ぎた人工林は今が伐採時という林野庁の方針で、流域の山は皆伐地がどんどん増え、令和2年の熊本豪雨の際にも皆伐や放置人工林が被害を大きくしたのは間違いない。山の現状を憂えていた松本さんは受講生の中では一番年長であるが、自伐型林業は高齢者でも女性でもできるというので、受講してみようと思った。

現在、11回目の研修を終え、チェーンソーやバックホーの資格習得中であるが、誰よりも張り切って学んでおられるように見える。林業と言えば、きつい、汚い、危険と言われた3K産業の一つではなかったか。すでに自伐型林業をやっている知人もいるが、みんなが楽しいし、やりがいがあるという自伐型林業。研修の内容や自伐型林業については追々お伝えしていく予定ではあるが、素人でも女性でも高齢者でもできるというのは間違いなさそうだ。

### “鎮山親水林業塾”



この林業塾は鎮山親水林業塾と名付けられた。山江村と九州林業塾の共催である。“鎮山親水”

とは、令和2年水害で、山の崩落現場や洪水の現状確認に自ら現場に足を運んだ内山寛治山江村村長が、今後の水害に対しては今までの治山治水では対応できないと山や川全体で雨を受け止める必要を実感し、掲げたスローガンだ。

山江村村長は「110万立方メートルの土砂が流れ込んだ。水害というと目の前の水しかみてないか、山の管理をしっかりとしないと今後の水害は解決できないというのを、今回の水害が教えてくれた。」と述べる。「山江村は9割が山。経営体に任せても赤字がでる。山の整備、山の生業をどうしたらいいのかなかなか思いつかなかった時に、自分で管理・施業をするとお金が残るという自伐型林業は山を守っていく手段になるのではないかと思った。」と九州林業塾からの提案に耳を傾け、研修会開催となっ

た。自伐型林業は2割程度の間伐を繰り返す多間伐施業である。大型重機は使わず、3トンの小さなバックホーでつくる、2m～2.5程の小さな作業道が特徴で、崩れない作業道づくりが基本である。「間伐を中心として1000年の木を育てていきたい。」「来年からは、森林環境税を投入して、希望者を支えたいし、そういう人を増やしたい。」と「人吉・球磨の先進事例として進めていきたい。」と内山村長は希望を述べた。

九州林業塾は、九州内で自伐型林業を行っている林業団体もしくは林業者の集まりである。代表は、福岡県八女市の江良裕一さん。江良さんも自宅の山が2012年の九州北部豪雨で、被害を受けられ、「災害に強い山にしたい!」と、自伐型林業を始められた。

九州林業塾は自伐型林業という実践自伐型林業に関する情報発信や会員間の交流などの活動と並行して各地で自伐型林業の講習や研修会を実施している。今回の研修会は、休眠預金を活用した助成金を受けての実現となった。

39日間研修の17日目が終了した現在、林業の基本となるチェーンソーやバックホー、林内作業車の操作を学び終え、今後自伐型林業の基本ともいえる道づくりを学んでいく。今後、研修生が今後どのような研修を終え、流域内でどのような活動をしていくのか、また、山江村でどのような山づくりの瀬策が展開されていくのか楽しみである。

## 令和5年度大会のお知らせ

日時：令和5年6月3日～4日

総会及び研究発表会（3日 10：30～）

場所：熊本高等専門学校八代キャンパス1階合同会議室

現地見学会（4日）

場所：八代市宮地町

\*詳しくは同封のチラシを参照ください。



写真は令和4年度大会の様子